

# 令和元年度（平成31年度）「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組

## 「品川区学力定着度調査」の趣旨

- (1)学習指導要領に示された教科の目標や内容の実現状況を把握し、教育課程や指導方法等に関わる区の課題を明確にすることで、その充実・改善を図るとともに、区の教育施策に生かす。
- (2)各学校は、教育課程や指導方法に関わる自校の課題・解決策を明確にするとともに、調査結果を経年で把握することで、児童・生徒一人一人の学力の向上を図る。
- (3)区民に対し、区立学校における児童・生徒の学力等の状況について、広く理解を求める。

**1 調査日** 平成31年4月16日（火）

**2 調査対象** 品川区立学校 第2～9学年の全児童・生徒

### **3 調査内容**

#### (1)教科に関する調査

○調査の趣旨に基づき、学習指導要領に定める内容について、基礎・基本および活用の力を測る問題で構成

<第2・3学年> 国語、算数

<第4～6学年> 国語、社会、算数、理科

<第7～9学年> 国語、社会、数学、理科、英語

**品川区立第二延山小学校**

## 【国語】

### (1) 定着状況の概要

- 全学年において、「読むこと」つまり読解の正答率は高い。昨年度より国語説明的文章において「教えて考えさせる授業」のスタイルにより筆者の意図など大切な事柄を正しく読み取る学習を進めてきた成果であると考ええる。
- ほとんどの項目で全国平均や区平均を上回っている。
- 単元問わず目標値から5%上回り、特に「読むこと」では全国平均よりも10ポイント近く上回っていた。
- △領域別正答率「書くこと」では、全国平均とほぼ同一で、区の平均を下回っている。また、成績下位層(30%)と中位層(50%)の児童が区と比べるとやや多く、苦手意識をもつ児童の底上げが課題として見られる。また、国語「言語についての知識・理解・技能」は全国平均より低く、漢字の習熟が十分でないことが分かった。

### (2) 具体的な課題

2年生	(書くこと) ・指定された長さで文章を書いたり、2段落構成で文章を書いたりすること。 ・適切な情報を選別して文章を書くこと。 (言語についての知識・理解・技能) ・漢字の習熟
3年生	(書くこと) ・指定された長さで文章を書いたり、自分の考えが明確になるように、具体的に文章を書いたりすること。
4年生	(書くこと) ・書こうとすることの中心を明確にして文章を書くこと。
5年生	(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項) ・第4学年で配当された漢字を書くことができること。
6年生	(言葉の学習) ・同音・同訓の漢字の使い分けができること。 (書くこと) ・目的や必要に応じて、文章の表現について理解することができること。 ・自分の意見を明らかにして文章を書くこと。

### (3) 課題の原因として考えられること

- ・「説明的文章」は、「教えて考えさせる授業」として校内研究で扱っており、読み取る力は身に付いている。「教えて考えさせる授業」の学習スタイルにより、理解したことを「話す」活動は十分に経験しているが、思ったことや話したことを文に書き表す(まとめる)経験が不足している。分かったことや考えたことを「書く」活動の経験が十分ではないと考える。
- ・漢字に対する関心・意欲が低い。モジュール学習での漢字練習及び評価テストが主であり、普段の生活から習得した漢字を使おうと意欲をもつ児童が少ない。
- ・全国平均よりも高い水準が見られるが、「書くこと」に関する活動が不十分だったり、要点を絞って書いたりする経験が不足していた。

### (4) 課題解決のための方策(取組指標)

- ☆「はじめ・中・終わり」の構造を意識させて、文章を書く方法を授業で教える。書く学習の機会を増やす。
- ☆書くことのポイントを授業で明確に教える授業を実施する。例えば授業の発問で「なぜなら～です」と根拠や理由を説明するように促す。
- ☆与えられた課題に対して、自分の考えが持てていない状態で「書く」活動は難しい。よって、説明的文章の読み取り等で理解したことを「話す」活動については継続して取り組み、「話す」活動の後に「書く」活動を積極的に取り入れていく。話したことをそのまま書けばよいという経験を積み重ねていくことで、「書く」ことに対する抵抗感を取り除いていく。自宅学習についても、1行日記等に取り組み、思ったことを書く習慣をつけていく。
- ☆漢字の成り立ちや構成の学習を通して漢字そのものへの理解を深めるとともに、国語辞典や本を常に手に取れる場所に置くなど漢字に親しむ言語環境を作り出すことにより、漢字を使おうとする意識を高めていく。

### (5) 次年度の数値目標

- ・正答率70%以下の児童の割合を全体の15パーセント程度とする。

## 【社会】

### (1) 定着状況の概要

○内容別では、どの学年においてもほとんどの単元において、全国や区の水準を上回っている。

○特に6年は「国土の自然などの様子」「情報産業や情報社会」の領域において、目標値や全国平均よりも10ポイント近く上回っていた。

△5年社会科の「活用」においては、区の平均を0.7ポイント下回った。

⇒前年度に設定した目標は、概ね達成できたと言える。資料を読み取り活用する力が、まだ定着していない状況も見られる。

### (2) 具体的な課題

4年生	(地域や市の様子) ・市の土地利用の様子について、地図を読み取ること。 ・地図帳の交通の様子について、市の土地利用と関連付けて、地図を読み取り考えること。 (生産や販売) ・地域の人々の販売の仕事に関するグラフの適切な作り方について、考えること。
5年生	(安全を守る活動) ・交通事故を防ぐための工夫について、資料をもとに考えることができること。
6年生	(日本の食料生産) ・生産者と消費者を結びつける取り組みについて考えることができること。 (自動車をつくる工業) ・組立工場での作業について理解していること。 (工業生産と工業地域) ・日本の貿易相手国について、複数の資料をもとに考えることができること。

⇒全学年、資料から事実を読み取る力は、まだ十分とは言えない。

### (3) 課題の原因として考えられること

- ・写真やグラフなどの資料から、情報を読み取る経験や資料から読み取った内容を考察し、自分の考えとしてまとめる経験が少ない。
- ・基礎・基本となる知識の定着が不足している。
- ・資料から読み取った内容を考察し、表現する経験が不足している。

### (4) 課題解決のための方策（取組指標）

☆毎時間の学習後には、自分の言葉で「まとめ」「考えたこと」を記述する機会をもち、学習に対していつも自分の考えをもととする習慣化を図る。

☆日々の授業において写真や資料から読み取れることを基に、話し合ったり、記述したりする学習活動を設ける。

☆単元末には「深める」段階を設け、複数の資料から読み取れることを基に、自分の考えを話し合う学習を行うようにする。単元末に基礎的・基本的な知識を問う学習を確認する。

### (5) 次年度の数値目標

- ・4～6年において、正答率70%以下の児童の割合を全体の30パーセント以下とする。

## 【算数】

### (1) 定着状況の概要

- ◎どの学年においても全国平均・区平均に比べて、ポイントが平均以上となっていた。しかし、一部の項目で校内の平均正答率が半分程度のものであった。
- ◎全体的な傾向として、数と計算領域において課題傾向がある。

### (2) 具体的な課題

2年生	(数と計算) ・ 3つの数の計算 ・ 文章題から場面を想像し、題意をとらえて立式すること
3年生	(数と計算) ・ 加法の結合法則 (図形) ・ 身近な図形的問題に対し、状況を文章や図から把握し、分かりやすく説明すること。
4年生	(数と計算) ・ 分数の数直線上での表し方について理解すること ・ 分子が1の分数が何個で1になるかを理解すること (数量関係) ・ 棒グラフの目盛りの大きさと最も大きい値に着目して、棒グラフをかくことができない理由を説明すること。
5年生	(図形) ・ 地図から情報を読み取り、平行四辺形の特徴を使って2つの道のりが等しくなる理由を説明することができること。
6年生	(小数の計算) ・ 整数÷小数第一位の商と余りを、小数点の位置を含めて正しく求めることができること。 (百分率と円グラフ) ・ グラフ1が西町のグラフであることを、根拠を示して説明することができること。 ・ 円グラフから割合を読み取り、比較量を読み取ることができること。

### (3) 課題の原因として考えられること

- ・ 文章問題において、「聞かれていること」「わかっていること」「答え方」の明確化が十分でない。
- ・ 計算方法については理解しているものの、計算が煩雑になり、ミスが起きてしまうことが多い。
- ・ 問題場面における式以外の図や数直線といったツールの使い方に慣れていない。

### (4) 課題解決のための方策（取組指標）

- ☆自分が何を求めようとしているのかを明らかにできるよう、問題文から「聞かれていること」「わかっていること」を視覚的に分別する読み取りをさせる。
- ☆問題における考え方について、図や数直線を描かせ、理由を相手に伝える説明的活動を行っていく。
- ☆計算練習の習熟の機会を増やしていく。また、確かめ算や数直線をワークテスト等にかく。

### (5) 次年度の数値目標

- ・ 正答率70%以下の児童の割合を全体の13パーセント程度とする。
- ・ 記述問題における考え方の明確な根拠を、70パーセント以上の児童がかけるようにする。

## 【理科】

### (1) 定着状況の概要

- 4年生の・全国平均・区の平均はすべての項目で上回っているが、正答率としては他教科に比べると高くない。
- 5年生の平均正答率は、全国平均・区の平均とほぼ同じ値だった。「自然事象についての知識・理解」と「物資・エネルギー」の領域は、定着が不十分であった。
- 6年生の平均正答率は、全国平均・区の平均は全ての項目で上回っていた。3.3ポイント上昇した。

### (2) 具体的な課題

4年生	(生命・地球) ・観察カードからアブラナとタンポポのちがいを読み取ること。 ・ホウセンカの種を正しくまいて世話をすること。 (物質とエネルギー) ・磁石のどのような性質を調べるための実験か推測すること。
5年生	(生命・地球) ・秋のサクラのようすについて理解すること、 ・容器にふたがあると、蒸発した水は出ていかず、内側に水滴がつくことを理解すること。 (物質・エネルギー) ・グラフから水の状態を読み取ることができること。 ・電流について理解していること。
6年生	(天気の変化) ・春ごろの日本付近の天気の変りかたを理解していること。 (植物の花のつくりと実) ・顕微鏡で見たときのアサガオの花粉を理解していること。 (顕微鏡の使い方) ・カバーガラスについて理解していること。 ・顕微鏡を正しい手順で使うことができること。 ・顕微鏡の倍率が変わり、クンショウモを判別することができること。 (ふりこのきまり) ・実験の誤っている箇所を指摘することができること。

⇒全学年、どの領域においても知識の定着は不十分だと言える。

### (3) 課題の原因として考えられること

- ・植物の観察は行っているものの、観察の視点をもって絵をかいたり、気付いたことを記述したりすることができていない。実験をして理解はしているが、知識として身に付いていない。
- ・学習で得られた知識と日常生活上に現れる現象とを結び付けるような体験活動や、課題に対して観察や実験などを通して主体的に追求させる学習活動が不足している。
- ・顕微鏡の使い方や特徴などで課題が浮き彫りになった。観察の時にしか使わないことや、台数に限りがあることなど、使用する経験が不足している。

### (4) 課題解決のための方策（取組指標）

- ☆実験時には、予想、条件、結果、考察をまとめ、説明できるようにする。特に考察は丁寧に行う。
- ☆実験結果を踏まえ、条件を変えた場合はどうなるか、既習事項の知識などを振り返らせながら、予想させたり、説明させたりする。
- ☆授業内での繰り返しの復習（前年度の学習に遡って）を毎時間の始めに5分程度実施する。
- ☆該当学年で必ず覚える必要のある用語は、ミニテストなどを行い定着を図る。

### (5) 次年度の数値目標

- ・正答率70パーセント以下の児童の割合を全体の15パーセント程度とする。
- ・「物資・エネルギー」領域において、正答率を3ポイント程度上回るようにする。

## 【まとめ】

### （１） 学校としてのとらえ

平成２６年度より本校では「教えて考えさせる授業」の手法を算数と国語（国語（説明的文章）は平成２８年度より）に導入し、教育実践を続けている。「教えて考えさせる授業」では、

- 単元のねらいの明確化（児童に身に付けさせたい事柄の明確化）
- 毎時のねらいと評価の明確化と一体化
- 言語活動を中心とした学習内容の理解の促進（理解確認・理解深化）

を研究の中心に据え、日常の授業における授業改善を目的として取り組んでいる。各教科の分析からも明らかなように、全体的な状況として学習内容の理解が高い児童が多く、一定の取組による成果が伺えると言える。特に、「大切なことを説明する」活動をどの学年でもコンスタントに実施したり、「友達と一緒に問題を解決する」場面を設定したりすることを継続的に行っていることにより、児童の学習に対する意欲も高くなっていることがわかる。

一方で、各教科の分析でも指摘した通り、不十分な内容も見られることから、各学年・各教科の指導の中で、その課題の解決をめざし、計画的に取り組む必要がある。

### （２） 取組状況の把握

「品川区学力定着度調査」の結果の分析から抽出した、各教科の課題の解決のための方策は、さっそく２学期からの指導に取り入れていく。短期的な取組の中で得られる成果は一部であるとは思いますが、取組を丁寧実践することが学習内容の定着には欠かせない。

２学期における取組状況の成果を把握するための方策として、１２月に「品川区学力定着度調査」を参考にした、学校独自の「基礎学力定着調査」を実施する。２～６年生を対象として、当該学年で１２月までに実施した学習内容の定着状況を図る調査とする。教科は、学力定着度調査と同じとする。１２月に同調査を実施することにより、年度内の取組のための具体的方策の検証が可能となると考えており、３学期に取組の修正等を実施する予定である。